

Title	メルロ=ポンティ研究：超越論的哲学のパラドクスとその内在的克服過程
Sub Title	
Author	池上, 明哉(Ikegami, Haruya)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1981
Jtitle	哲學 No.72 (1981. 1) ,p.137- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文審査の要旨および担当者
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000072-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論文審査の要旨および担当者

甲第 608 号 池 上 明哉

論文審査担当者 主査 慶應義塾大学教授 文学博士 大谷愛人

副査 慶應義塾大学教授 三雲夏生

学力確認担当者：副査 専修大学教授 市倉宏祐

(論文審査の要旨)

「メルロ＝ポンティ研究」

—超越論的哲学のパラドクスとその内在的克服過程—

梗 概

本論文はフランスの哲学者メルロ＝ポンティ Maurice Merleau-Ponty (1908-61) の思想の全体像を捉えることを目的として作成されたものである。しかしそれにあたっては、論者は、まず、メルロ＝ポンティがその学究の初期から晩年に至るまで取り組み続けた根本的な課題を〈超越論的哲学のパラドクスの解決〉にあったとみなして、その解決への努力を、彼の全著作にわたって、それぞれの著作が提示する諸概念の検討を通じて、究明し記述するという方法をとっている。本論文は、彼の思想が四つの段階を経て変化することに応じ、四つの章に分けられ、その各々の章では、その段階をなす時期の主要著作が提示する基本概念が題名として掲げられ、考察されている。本論文の構成の概略は次の通りである。

序論 超越論的哲学のパラドクス

第一章 構造概念の両義性 ここでは主として『行動の構造』(1942) が検討される。

第二章 共存—現象野の構造 ここでは主として『知覚の現象学』が検討される。

第三章 制度—意味生成の構造 ここでは1950年以降に書かれた言語論と歴史論に関する多数の論文が検討される。

第四章 肉—超越論的領野の構造 ここでは晩年の講義や遺稿が、主として『研究ノート』と『見えるものと見えないものの』が検討される。

総括と結論

まず「序論」では、フランスのメルロ＝ポンティ研究史が詳述され、綿密な検討が加えられた後に、メルロ＝ポンティの哲学の中心問題は、〈知覚世界への人間の受肉〉ということがらの可知性の問題であることがつきとめられる。しかしこの問題は、〈超越論的哲学のパラドクス〉をどのようにして克服するかという問題を孕むことが指摘され、メルロ＝ポンティは終始一貫この問題を取り組んだ旨が強調される。ここにいう〈超越論的哲学のパラドクス〉とは、デカルト、カント、フッサール、サルトルという系譜をなす超越論的哲学が、人間を、コギト、つまり、思惟する主観としてとらえ、それを意味の普遍的構成主観として確立しようとして非実体化すればする程、かえってそれを世界内在化せざるをえなくなり、それによって構成作業そのものが困難になってゆくという事情が起ることを指す。言い換えるなら、それは、世界の部分的要素である人間的主觀性がいかにして全世界を構成することになるのか、という問題である。そこで論者は、メルロ＝ポンティにおけるこの問題との取り組みを、〈構造〉〈共存〉〈制度〉〈肉〉という四概念で表わしうる彼の思想展開の順序に従って見てゆき、結局その問題の解決が〈肉〉なる概念においてなされた、とみなすのである。

特徴と意義

本論文について何よりも先に評価さるべき点は、本論文は、メルロ＝ポンティの思想の全体像を捉えようとした、同哲学者についての総合的研究のわが国での最初の誕生となる、という点である。近年、わが国では、メルロ＝ポンティの思想が多方面の研究者達からさまざまな関心を寄せられてきたが、彼の著作と思想が余りにも難解なために、既にわが国で発表されてきた論文は、彼の思想の一部か、或いは、著作の一部を扱ったものばかりであった。ところが、こうした事情のもとで、論者は、彼の思想の根本をなすものを捉えようとし、それを彼の全著作にわたって考察するという、先人達が未だに試みなかった冒険を敢て試み、それをここに現実のものにしたのである。論者は、その難解さにおいては定評があり、それも晩年に近づけば近づく程その難解さをいよいよ増していくメルロ＝ポンティの著作や遺稿——とくに晩年の遺稿の一つ『見えるものと見えないもの』にいたってはその難解さは極に達しているとさえされている——をその悉くにわたって熟読理解し、それと合せて彼に関するフランスの研究文献を隅なく涉獵し、それら研究成果を充分に検討・参照しながら、極端に偏った解釈に走ることなく、テキストに正確に即しつつ、極めて丁寧に本論文を記述している。従って本論文を読了するとき、これだけ

の論述がなされ得たことそのことに対し、少なからぬ感歎をおぼゆるものである。この意味においてわれわれは、本論文がわが国における一番最初のメルロ＝ポンティの綜合的研究として誕生したことの意義を、何ごとにも優って高く評価したいと思う。

しかし本論文がこのような特別の意義を担って生れ得たのも、そこには何よりもまず、論者の特別な学問的エネルギーが働いていることを挙げればならない。それは、本論文の作業をすすめる論者の根源的な学問的態度を形成するとともにそれを介して本論文の構成や方法等その全体にわたって透明に作動しているものである。本論文に接するとき、論者がメルロ＝ポンティの思想の発展過程を可能な限り正確に丁寧に記述してゆこうするその客観的姿勢への心くばりが論文の全面に漲り、それが本論文のとりわけ構成に透徹性をかもし出す働きをしていることが強く印象づけられる。従って、そこには論者の学問的姿勢のもう一つの契機が強く深く働いていることを想定してみたくなる。しかしその真相は、「まえがき」の中のほんの二、三の言葉から推して、論者が、本論文の作業にあたっては、何ごとに対してよりも、論者自身の学問的態度そのものとそれに基く方法とに、最も誠意を尽した最も厳密なる学問的自己検討をほどこしたと考えられるその根源的姿勢のうちに求められよう。そしてこのことの明白な証拠は、論者が本来は倫理学の畑にありながらも、本論文の作業にあたっては、現象学という哲学の領域にまで敢て踏み込み、そこから倫理学の領域への見通しをつけようとしている点に認められる。即ち、論者は、元来フランスの実存思想、とりわけサルトルのそれに深い倫理学的関心を寄せていたので、このメルロ＝ポンティへの関心も最初はそのレベルにおいてであった。ところが論者がそのレベルでメルロ＝ポンティの実存思想を研究していたとき、論者には、主体性としての〈人間〉の問題を扱うにしても、その問題の一つ手前に、その主体性としての人間にに関する〈理論構成〉の問題が横たわっており、その両者の問題は互いに切り離せない関係にあることに気付いた。こうして論者は、主体性としての人間が〈哲学的理論構成〉において占めうる位置を明らかにする必要を感じた。しかしその作業は、〈人間〉を扱う〈近代的思考法〉そのものを根本から問い合わせ作業を伴うものであり、つまり、哲学の領域での作業を伴ってくるのである。従って大きく元へと戻るその作業は、前述のような論者の居場所からするなら、他人には想像もつかない程の難事となつたことは疑いない。しかし論者は、本来の課題である倫理学研究を真に学問的なものとなすために、敢てこの難事を取り組んだのである。それ故論者にとっては、本論文それ自体が一つの大きな主体的・実存的果断の賜物であった、とみてよからう。しかも論者は、その苦闘を、少しも論文の前面に押し出すことなく、むしろそれをより深いところから受け取り直し

論文審査要旨および担当者

て、それを客観的学問的態度へと、そして更にそれを介して、本論文の構成そのものへと、透明化していったのである。本論文の本領はまさにここにあり、以下述べる内容上の諸特徴もこの視角から評価さるべきと思う。

本論文の内容上の特徴は多々見られるが、一応次の四点にまとめることができる。

まず第一に、論者は、本論文を、メルロ＝ポンティ研究史の線上に、極めて明確に位置付けしている点があげられる。論者は、「序論」のところで、フランスにおけるメルロ＝ポンティ研究の状況を、丁寧な整理のもとに、詳細に記述している。それは〈メルロ＝ポンティ研究史〉の見事な記述で、これによって、フランスにおける今日のメルロ＝ポンティ研究の状況が一目瞭然とわかる。そしてそれを通じて、論者は、本論文を、その線上にはっきりと位置付けている。このことは一つの学術論文が書かれる場合、何よりも先きになさるべき重要な作業である。論者によると、フランスでは、メルロ＝ポンティの思想展開に関し、初期の著作と晩年の遺稿との間に、彼の基本的視点の変化があるか否かをめぐって、議論が大凡三つに分れているという。つまり、変化なしとみるもの（ヴァーレンスやイポリット）、変化ありとみるもの（リクールやティリエット）、部分的変化か問題をとりあげる地平だけの変化を認めるもの（ジェラーツやマディソン）の三つである。しかし論者によると、この三者にはひとつだけ一致した点があり、それはメルロ＝ポンティにおいて未解決のまま残された問題についてであるという。それは『知覚の現象学』において、諸経験の相互連関という〈合理性〉の問題が残されたままだという点についてである。論者は、この一致した見解に、むしろメルロ＝ポンティの中心課題の重なりを見る。つまり、そこには〈身体主体の可知性如何〉という問題が、重なり、そしてそこから〈知覚世界への人間の受肉〉の問題、そして更にそこに〈超越論的哲学のパラドクス〉の問題を見るのである。こうして論者は本論文を研究史のなかに明確に位置付ける。

そこで第二の特徴として、論者のそのような観点があげられる。その観点を表わす〈超越論的哲学のパラドクスの解決〉という言葉は、メルロ＝ポンティが使った言葉ではなく、論者の言葉である。これだけでも明らかのように、この観点は確に或る種の独自性をもつ。そのため論者は、その説明を、「序論」のみならず「第一章」以降の章にわたって非常に詳しく行っている。論者によるなら、メルロ＝ポンティは、自分を、デカルト→カント→フッサール→サルトルという超越論的哲学の系譜の最も究極の位置、最もラディカルな位置にある者として意識していたという。つまり、論者は、このパラドクスがメルロ＝ポンティにおいて最も深刻な形で現われているとみている。その理由は、その哲学の系譜に属する前述の先人達は、

いずれもこのパラドクスの解消に挑戦したが解決をみなかつたため、それがメルロ＝ポンティに幾重にも重って持ち込まれた、という点にある。そのため、論者によるなら、メルロ＝ポンティにおいては、この問題を解決するために、それら先人達が歩んだ全行程を、自ら辿り直すことになった、というのである。そして論者は、メルロ＝ポンティのその辿り直しの過程の中に、同哲学のパラドクスの内在的克服過程を見ようとしたわけである。論者のこのような観点は、確かに新鮮味を湛えた極めて注目に値するものと言ってよい。こうしてこの観点が本論文全体の基本線として貫かれてゆく。

第三の特徴として、構成の仕方と方法とがあげられる。本論文は、前述の観点から、その問題とのメルロ＝ポンティの取り組みの過程を、彼の思想展開の順序に従って考察してゆく。しかしその際一番問題になってくるのは、思想の発展段階をどのように区切るかという問題である。論者はそれを四つの時期に分け、四つの概念をもって代表させている。そしてこれをもって本論文の構成の柱としたことは、一見淡白にみえるが、実は論文全体を極めて明晰にさせ、卓見と言わなければならない。というのは、もしその思想の発展過程を、ただ漫然と全著作をつなぐような仕方で追うなら、迷宮入りになることは明らかだからである。しかし論者は後者の方法を警戒し、前者の方法をとり、〈構造〉〈共存〉〈制度〉〈肉〉という一連の四概念の論理的連関を辿る仕方で、発展過程を考察したのである。その作業の中で特に注目されるのは、「第三章」を読むことによってはっきりわかるように、この「第三章」に該当する時期を設けたことである。つまり、1950年代に〈制度〉という概念に関する問題を扱った、多数の言語論と歴史理論に関する論文が書かれた一時期を、はっきりと確定したことは、論者独自の考えによるものであるが、これによって『知覚の現象学』から晩年の時期への橋渡しの時期が出来たわけで、〈超越論的領野への移行〉の過程がはっきりしてくる。尚、論者はその各章を記述するにあたっては、フランスの多くの研究文献を一々検討し参照し、念には念を入れて論述をすすめているが、それは学術論文の論述の方法としてまことに当を得ていると言わなければならない。しかし本論文の方法に関し最も注目に値する点は、論者が、本論文の構成にあたって、自ら、現象学的方法をアノニムで導入している点である。しかしこの点は、論者の本論文で展開している見解の内容と相即するので、次の箇所で述べることにする。

そこで最後に、論者の見解自体があげられる。既に述べたように、論者は、前述の観点に立って、前述の四概念の論理的連関を辿ってゆくが、その辿り方は決して平板的な仕方によらない。その辿り方は、一つの形容をもってするなら、水面上を追う作業と、水面下を追う作業との二重の作業からなっている。水面の上では、文

論文審査要旨および担当者

字通り、概念の思想内容が追究されてゆく。しかし水面下では、論者は、メルロ＝ポンティがそれら個々の概念の形成にあたってその都度その形成の仕方そのことへの問題性に遭遇した点に、つまり、その学問的営みそのことに、更に言うならばその〈超越論的哲学〉の営みそのことに徹底的に反省的にかかわり続けた点に、着目してゆく。そして、そのためメルロ＝ポンティにとっては、〈超越論的哲学の定義のしなおし〉〈定義しなおされた超越論的哲学の構築〉こそが水面下を走る根本課題になっていると見ているのである。つまり、論者は、各章の個々の概念に、単なる思想的なものだけを見ているのではなく、それらにおいて、新しい〈学〉の根本的な建て直しのくわだての成否の過程を見ているのである。従ってもし本論文の読み方ともいべきものがあるとするならば、それは、むしろ後者の作業を基本的な視点に据えながら前者の作業を読みとつてゆくという仕方が妥当と考えられる。しかしそれは兎に角として、論者のそのような方法は、本論文の構成にあたって、まさにその作業への〈現象学的方法〉そのものの適用といつても差支えなかろう。そしてこの論文の骨格の中心はここにあると言つてよからう。以下簡単にその作業の過程を追つてみる。まず「第一章」では、『行動の構造』がとりあげられ、メルロ＝ポンティが〈構造〉概念の両義性という問題にぶつかり、今までの作業では、現象的身体と実在的身体との、統一的把握が不可能であることを痛感し、その統一的把握を可能にするためには、それを司る〈超越論的哲学〉そのものの定義のし直しを必要と感じ、こうしてここから〈定義しなおされた超越論的哲学の構築〉が彼の課題となつた旨が述べられている。そしてその課題は『知覚の現象学』へ送られるので、これが該書とともに「第二章」で扱われる。そこでは、該書が、現象野の記述を当面の課題とするが、実は超越論的領野への転換を意図していることが指摘され、この観点から、該書が提示する〈共存〉の概念が検討される。論者はこの概念を〈構造〉概念の発展であるとともに、以後の諸概念の原型をなすものとみる。しかし、論者は、この概念を構成する〈意識・身体・他者・事物〉という四項間に相互媒介が欠けている点を指摘する。それとともに、メルロ＝ポンティが超越論的主観性の代替物を〈無言のコギト〉に求めたことをとりあげ、これも言語との相互媒介が行われていないため抽象的に不明なものとなっている点を指摘する。こうして論者は、該書においては、その意図の方は達成されなかつたとみる。「第三章」の設定に関しては、既に、前述の「第三」の箇所で述べた通りであるが、論者はここで、前述の意図である〈超越論的領野への移行〉を1950年代のメルロ＝ポンティが、言語論と歴史理論とを通じて、どのように求めていったかを述べる。即ち、そこでは、主・客〈交換〉の概念と〈制度化〉の概念が確立されてゆく次第が突きとめられ、この再構造化作用を通じて、経験がそれの〈意味〉にまで転化し、〈真理〉

となり、こうして〈超越論的領野への移行〉が着実に準備されてゆく次第が述べられる。こうして、その移行が完全に行われ、〈超越論的哲学のパラドクス〉の問題が解決するのを、論者は、〈肉〉なる概念においてであるとみて、これを「第四章」で扱う。本章で、今まで〈超越論的領野〉と呼ばれてきたものが大文字の〈自然〉となることが明らかにされ、この〈自然〉において、〈超越論的哲学の定義のしなおし〉〈定義しなおされた超越論的哲学の構築〉が成功をみたことが述べられる。ところで本章では、論者は、晩年の講義と遺稿とを取りあげる。そしてまず、それらにおいては、主題が〈自然〉になったこと、またそれによって、純粹思惟に普遍的なものを求める古典的立場に対するものとして〈感覚的なものこそ普遍的なもの〉という主張が確立されたこと、そしてこのようにして、超越論的反省の歩みが、より具体的な経験へと下降することによって、かえってより普遍的な思考への上昇が行われた事実が述べられる。まず『研究ノート』においては、もはや表象という概念は否定され、知覚が差異化の能力としてそれ自身思考でもあるものとしてとらえなおされ、それに応じて現象と実在という古典的区別は廃棄され、真に存在するものは、もはや、現象の背後にある即自存在ではなく、諸現象が相互に跨ぎ越し、絡み合いつつ奥行をなしている次元性そのものであること、こうして存在は、次元性・奥行として、〈肉〉なる概念をもって規定されるに至る、ということが述べられる。こうして最後に『見えるものと見えないもの』が取りあげられ、これの主題である〈肉〉なる概念において、メルロ＝ポンティが、今まで取り組んできた問題の解決をみた旨が突きとめられる。つまり、論者によると、この概念こそが、〈差異〉と〈交換〉の概念を通じて、先述の〈共存〉体系(意識・身体・他者・事物)を、自らの中に一体化し、そのことによってその四つは、現象としての四肢における相互媒介の関係におきかえられることになり、それらすべての間に〈可逆性〉の関係が確立され、そこにおいてはそれら現象のいずれかを〈見るもの〉(超越論的主観)として固定的に指定しえなくなり、つまり、それらすべてが〈見るもの〉であるとともに〈見えるもの〉、そして〈見えるもの〉であるとともに〈見えないもの〉という二重性をもった現象となり、そこに〈全体的可視性〉が構成されることになる。こうして諸現象は、現象の外に、〈超越論的主観性〉なるものを前提することなしに、専ら現象相互の交叉を通じて、その内在的可知性を得ることになる。従って、そこでは〈超越論的哲学のパラドクス〉は解消してしまう。つまり、メルロ＝ポンティは、超越論的領野の構造を〈肉〉にみたのであり、〈現象野の構造〉(共存)はそのまま〈超越論的領野の構造〉(肉)になるわけである。尚、論者は、「総括と結論」のところで、この構造概念と構造主義の構造概念とを比較し、後者が〈記号体系〉であるのに対し、メルロ＝ポンティのそれは、〈現象体系〉で

論文審査要旨および担当者

あると述べている。以上が論者の見解の特徴であり、極めて核心を射た見解と言わなければならない。

以上、本論文の特徴と意義について述べたが、本論文にも不足がないわけではない。例えば、本論文の方法論についてのもっと明解な説明とか、生硬な訳語や表現等主として論述上の問題への配慮等があげられる。しかしそれらは本論文の真価を毫も損うものではない。

従って、以上述べた本論文の意義、研究的態度、研究史上の位置付け、観点、構成と方法、そして見解等々の特徴と合せて、本論文が今日の倫理学方法論の基礎研究の分野に大きく貢献するものであることが認められることにより、本論文の論者、池上明哉教授は、文学博士の学位を受けるにふさわしいものと判断する。

以上